

1 東京都体操協会パルクール委員会と横須賀市の新たな取り組み

～横須賀市にトップ選手が移住し、パルクールの聖地化を目指します！～

市長

横須賀市は2022年から「アーバンスポーツのまち」として、パルクールやBMX、ストリートダンスなどのアーバンスポーツの推進に力を入れてまいりました。このたび、本市と東京都体操協会パルクール委員会との新たな連携として、国内外で活躍するトップアスリートが、横須賀に移住することで「横須賀市所属選手」となります。これは地域に根ざした活動を通じ、新たな魅力を創り出し、多様な人が集う「活力あふれる横須賀」をつくる挑戦でもあります。

1つの競技で頂点に立つアスリートは高い感性と深い思考を持ち合わせています。そんな彼らが、より市民に近い場所で共に暮らし、共に街の未来を創っていくことは、横須賀市にとって大きな誇りであり喜びです。選手たちは、パルクール教室などの地域活動を通じて、市民の皆様と交流しながら、アーバンスポーツの輪を広げていきます。その関わりは、フレイル予防などの健康増進や、世代を超えた交流を促進し、地域課題の解決にも寄与すると確信しています。こうした挑戦を長く続けていくには、市民の皆様からの、応援や支援といった循環が欠かせません。市民との関わりから生まれた、ファンの皆様からの応援や、今回設立する寄附制度による支援など、多くの方と手を携えながら、選手の活動が支えられていきます。横須賀市では、この循環を大切にし、アスリートが安心して、挑戦を続けられる環境を整えてまいります。なにより、市民の皆様がトップアスリートの挑戦を身近に感じ、その姿に、夢や希望を抱いていただくことが、未来を切り拓く原動力となります。横須賀市は、多様な文化と人々が交わる国際色豊かな都市です。その多様性を生かし、誰もが共に歩み、変化を恐れず、新しい価値を創り出すことで、時代の先駆者として、挑戦し続けられる地域づくりを推進してまいります。今回のパルクールによる挑戦は、その未来を切り拓く鍵の1つであり、多くの市民と共に、新たな輝きを放つ街へと、確実に成長していくことを心から願っています。横須賀市としては、ふるさと納税などの寄附を活用した活動支援を行います。パルクールならではの返礼品を展開し、多くの皆様から寄附を募ってまいります。また当面の間、選手の居住と活動の拠点となる「THE Base APARTMENTS」の居住空間を、提供いたします。私たちはスポーツの力を軸に、次世代に誇れる「活力あふれる横須賀」の未来を創る挑戦を、これからも力強く進めてまいります。

東京都体操協会パルクール委員会 吉田委員長

本日は、お集まりいただきありがとうございます。今、上地市長から説明があったように、いよいよ東京都体操協会パルクール委員会は、本格的に横須賀市との連携に取り組みます。まずは、この後ご紹介させていただきますが、日本のトップ選手2名が横須賀市に移住します。また、そのほかの今後活躍が期待される選手たちも、これからどんどん移住してきます。そして横須賀から世界を目指します。彼らに憧れる横須賀の子どもたちが運動を通してパルクールに接し、それとまた別に、大人の方々、シニアの方々が、予防医学を中心にパルクールの基本動作を習得することで、転倒防止や健康増進につながっていきます。これからいよいよ本格的にスタートしますが、まずは具体的な連携内容として、日本のトップ選手たちが全員、横須賀市のロゴを常に胸に貼り付けて活動したり大会に出場したりします。横須賀市所属選手は、今後増えていきますが、選手による市内で行われるいろいろな教室や、パルクール体験会、学校訪問など、積極的に参加することで、パルクールとは何なのか、パルクールの本当の哲学を市民の方々に広めていきます。そうすることで、子どもたちの夢や挑戦への意欲が高まることにつながると期待しています。

パルクールの基本動作は、運動能力の基礎を育てると言われていますが、子どもたちに限らず、大人、シニアの方々までパルクールに挑戦していくことで、市民の方々の運動神経の向上や健康増

進につながっていくことが期待されます。本当に今まで日本にはない新たな取り組みです。是非、皆様も注目していただければと思います。

それでは選手を紹介したいと思います。まず1人目は、鈴木智也選手です。鈴木智也選手は過去2回に行われているパルクール世界選手権の日本代表でもあり、今年のパルクール・ワールドカップの日本代表の1人でもあります。それでは鈴木選手、お願いします。

～鈴木選手入場～

もう1人の選手を紹介したいと思います。次の選手は大貫海人選手です。大貫海人選手は昨年日本選手権フリースタイルの優勝・金メダリストであり、そして昨年は、日本のフリースタイルの得点、最高得点を2度も更新しているという、まさにパルクール界のキングと呼ばれる選手です。それでは大貫選手、お願いします。

～大貫選手入場～

鈴木選手

プロアスリートの鈴木智也と申します。この度は横須賀市にスポンサーをしていただき、大変光栄に思います。本当にありがとうございます。横須賀市から世界にパルクールを普及させるという目的で、僕も海人選手も一緒に貢献できたらなと思っております。

小学校訪問を何回かさせていただき、また、体験会などを通して、高齢者の方とのワークショップや、予防医学というものも現在行っております。皆様と触れ合う機会があると思いますので、今後とも是非応援のほど、よろしく願いいたします。

大貫選手

パルクールアスリートの大貫海人です。この度は横須賀市が僕らのスポンサーになっていただけるということで、横須賀市の方々には本当に感謝しています。ありがとうございます。

これから、横須賀市から世界に向けてパルクールを発信していけるということで、僕もとても興奮しています。また、小学校訪問も鈴木選手と同じで何度か行かせていただき、活気あふれる子どもたちの将来的な何かに僕らの活動が繋がればいいなと思っています。

■質疑応答

記者

あまりにも動きが早くて、動画でも追いつけませんでした。冒頭、市長と委員長、あるいは選手の方々にお伺いします。まだまだパルクールというものが浸透しきっていないかと思います。パルクールの魅力を市長から一言ずついただけますでしょうか。

市長

魅力は一言というより、私たちが若い頃、校庭や公園で駆け回ったあの思い出が、見ていて蘇ります。今みたいに洗練されたスポーツだけではなくて、いろいろなスポーツがなかった時に、そうやって子どもの頃に体を鍛えたということをもぎまぎと見せつけてくれます。人間の能力というか、あの活動の俊敏性を見ると、こうだったなと昔を思い出します。これこそやっぱり、人間が生きていくことだと。アーバンスポーツの原点にこれはなり得る、本市を選んでくれたことをありがたいと思っています。

東京都体操協会パルクール委員会 吉田委員長

パルクールは、まず一言で言うと、用具を使わないことが最大の魅力です。何にいちばん近いかなと考えると、それはランニングです。ウォーキング、ランニング、マラソン。皆様ご存じのとおり、30～40年前までは、市民ランナーで誰がフルマラソンを走ることができるのだ、あれは選手が走る

ものと思われていました。今では市民がこぞってフルマラソンに参加しています。その目的はいろいろあると思います。記録を目指す人、健康を志す人。パルクールは非常にそれに似ているスポーツです。これは競技というより、トレーニングをする文化と皆様に認識していただければと思います。とにかく用具を使わずにトレーニングをして、予防医学につながっていく、そして、カッコいい、これが全てです。

鈴木選手

パルクールの実践者からすると、魅力というと、簡単な技でもそれがパルクールの技になるというものになります。よくこういう例えを出すのですが、横断歩道の白い線をジャンプするだけでも、それは「両足でジャンプするという行為」、パルクールでいう「プライムジャンプ」という行為に当たりまして、それでもう1つの技として成り立ってきます。何かものを飛び越すという一連の動作も1つの技としてパルクールの中では組み込まれています。その技をするにあたっての行為自体が簡単なので、技を習得できた時の実感と嬉しさを味合うというハードルが、他のスポーツよりは簡単に超えられると思います。そのため続けられる方がすごく多い。そこが魅力だと思います。

大貫選手

僕が思うパルクールの魅力は、例を挙げますと、体操競技のように全員が全員同じ動きをしているのではなくて、それぞれの個性、スタイルというものがあって、それをパルクールはとでも引き出してくれることです。かつ、ルールがないというところで、自分の身体を使って、いかに自分の中でどう表現するかということが、パルクールアスリートの皆さん、個人個人、それが違って、誰に似ているとか、誰を真似るなど、そういうものではなく、自分が生まれ持って生み出したスタイルが見られる。人によって様々な違いがあることが、パルクールの魅力だと思っています。

記者

ありがとうございます。あと幹事社からもう1点だけ。今、胸に「横須賀市」というロゴをつけています。スポンサーというお話があり、先ほど冒頭、横須賀市所属選手とありましたが、これは市側に伺うのは、スポンサー契約なのか、あるいは例えば特別職の職員のようなものになっているのかというのが1点。あとはパルクール委員会の方に伺うのは、こうした地方自治体と契約というか関係を結ぶのは初めてなのかどうか、この2点お願いします。

横須賀市文化スポーツ観光部長

今回のスポンサー契約と申しますか、こういった取り組みは、まず特別な職員になっていただくということではありません。市は先ほど申しあげたような、例えばパルクールならではの返礼品のあるふるさと納税、それから企業版ふるさと納税、個人・企業からの指定寄付、またスポーツ選手の活躍への奨励金制度、こういったものをアーバンスポーツに使っていきながら、私どもは税金を使うことなく、一般の方、外部の方から多くの資金を集めて、それを選手の方々の活動費、遠征費等に使っていただいて、横須賀から羽ばたいていただく、そういうようなスキームで今回は行ってきます。

記者

簡単にいうと、スポンサー契約みたいなものということでしょうか。

横須賀市文化スポーツ観光部長

そうですね。スポンサー契約、市の方で資金等を集めて、そちらを援助していく、支援していくというような仕組みになります。

東京都体操協会パルクール委員会 吉田委員長

このスキームに関しては、実は完全に新しい、今まで事例のないものです。通常、こういうパルクールのプロ選手は、どこかの企業と契約して、そのメイン企業の所属となります。よく新聞に出て、オリンピックでもそうですが「なにになに選手どこどこ所属」のようなものです。それが今回で言う「横須賀市所属」ということになります。今まで、特に体操競技でこのような例は、過去に

もないですし、体操以外でもほぼ例がないというスキームです。

実はこのスキーム、なぜ考えついたかという、箱根駅伝で青山学院大学が新潟県妙高市のワッペンをつけてずっと何年も走っておられます。これは多分、妙高市が何らかの形で青山学院大学駅伝部と協定を結んでいるのだなという発想のもと、妙高市の市長と、いろいろとコミュニケーションを取ると「そういったことがある」ということでした。それであれば、我々体操業界でも、パルクールは新しいコンテンツでもありますし、せつかく 2023 年からパルクールの「トップ・オブ・ジャパン」、つまり日本一決定戦も横須賀の地で開催していますし、その他のもろもろ、横須賀でパルクールをいちばん強化していますので、横須賀から新しいスキームを発信して、横須賀モデルというものを全国の市町村に、スポーツでこういった取り組みもありますよというものを示せばいいのではないのかと思いました。また、日本体操協会にも所属先の登録が存在しないといけないのですが、もうすでに日本体操協会の中に「横須賀市」が認められた団体として登録してあります。今後、彼らが出ていく大会等では、リザルトにも「鈴木智也、大貫海人（横須賀市）」と出ます。

記者

両選手に出身地と現在の居住地と、いつから横須賀に住み始めるのか教えてください。

鈴木選手

鈴木智也です。僕の出身地は神奈川県小田原市の早川です。今もそこに居住しています。移住予定は、すでに引っ越しの準備を始めているところで、5月12日から僕たち2人がフランスでの世界大会に参加するのですが、その前に引っ越しが終わるように手配を進めております。

大貫選手

大貫海人です。僕は神奈川県とは縁もゆかりもない、千葉県の船橋で生まれ育ちました。委員長から機会をいただいて、このような横須賀と一緒にパルクールの取り組みをさせていただいています。こちらに引っ越ししてくるのは、2人で行く5月のフランスでのワールドカップの後になると思います。

記者

今も船橋にお住まいですね。

大貫選手

今も船橋です。

記者

あとお2人、すみません、生年月日だけ教えてください。

大貫選手

僕は2003年の3月5日ですね。

鈴木選手

僕は1998年の1月31日です。

記者

委員長、このパルクールの日本の競技人口というのはどのくらいでしょう。

東京都体操協会パルクール委員会 吉田委員長

今、競技人口という明確なものはないのですが、例えば日本体操協会が主催する大会、またはそうではない団体が主催する大会に参加する競技というものに取り組んでいる人でいうと、おそらく5,000人ほど全国には散らばっているかと思います。特に今、子どもたち、小学生、中学生が、スケートボードもそうだと思いますが、どんどん増えている現状です。

記者

両選手にお伺いしたいのですが、パークールと横須賀の親和性というのはどのように感じていらっしゃいますか。

鈴木選手

そうですね。横須賀市で3年前、大会が開催されました。横須賀市は海の街だと思うので、海のバックグラウンドを背景に、最初に海があるところで大会を開催できた。パークールは街の中で動くイメージがありますが、開けた場所で動ける、なかなか大会としては珍しいものでした。写真映えもしますし、やはり動きの中で動画を撮るようになって、後ろの背景が開けている方がかっこよく撮れる、大会で、僕はそこに親和性を感じたかなと思います。

大貫選手

僕は「アーバンスポーツの街」であるということです。パークールもそこで親和性があると思います。先ほど鈴木智也選手がおっしゃっていたように、開けた場所でパークールをすると、僕らの動きがすごく映えます。また、普段、僕たちは、難しい技、初めて外で挑戦する技をやる時に、砂浜でやることが多いです。それも海ですし、横須賀も海の街というイメージもあり、親和性があると思います。

記者

ありがとうございます。パークールの教室もやられたりして、競技人口の拡大というところはあると思いますが、課題というか、このあたりがもう少し改善されるといいなというような、例えば練習場所など、街中で自由に動けるのかどうか分からないのですが、もし課題があれば教えてください。

東京都体操協会パークール委員会 吉田委員長

課題は実はたくさんあります。まず、パークールにはいろいろな種目があるのですが、この2人が主戦場になっているのは「フリースタイル」という、スノーボードでいうスロープスタイルのような、点数を競うものです。そこで、もう十分、今彼らは世界のトップランカーです。ベスト10に確実に入っています。もっともっといい練習環境があれば、本当に、今回の冬季オリンピックのスノーボードではないですが、日本人がトップを独占していくというのは、もう夢ではありません。とはいえ、まだまだ練習環境が整っていません。器械体操は大学に行けばありますが、パークールの場合には練習環境が少ないので、そういった練習環境の整備が課題です。これは、外でも安全にできる場所、また体育館のようなパークールを専門的に練習するトレーニングジムのようなものが増えていくことが、まず、いちばん強化には必要です。

それ以外にやっぱり必要なこととしては、裾野を広げていく上で、インストラクターがまだ足りていません。どうしてもまだまだ過渡期なので、彼らのようなトップ選手が子どもたちにも教えているという現状です。今度はもっとパークールを教えられる人を教育していくということも必要です。その件に関しても今後、横須賀市と連携しながら「横須賀モデル」としてインストラクター制度も今後作っていく計画があります。

記者

ありがとうございます。市長、練習環境の整備という話ありましたが、市として何か考えていきたいことはありますか。

市長

これは当然のことながら、考えていきたいと思っています。

記者

新しく作るということも含めてですか。

市長

新しく作るのではなく、様々な方法があると思います。既存のところ、例えば、ファシリティ・マネージメントの中で、今、空いているところを使うなど、いろいろなやり方があると思います。海が見える環境を整えるなど、それはこれから考えていきたいと思っています。

記者

分かりました。ありがとうございます。

市長

1点、パルクールのいちばん良い、僕が好きな点は、アドレナリンが出まわること。大人がアドレナリン出るような場面は、あまりないのです。瞬間、瞬間、反射的に見たこともない技を見ると、アドレナリンが出てくる。瞬間的にアドレナリンが出てくるのはファンとして、見ている側から素晴らしいと思います。

記者

歌とどっちが好きですか。

市長

同じくらいですね。

記者

「THE Base APARTMENTS」はどのようなアパートなのでしょう。何部屋くらいあって、練習するようなスペースがあるのか、言える範囲で問題ないので教えてください。

横須賀市文化スポーツ観光部長

「THE Base APARTMENTS」は、上下水道局の旧待機用宿舎でございました。こちらが、活用されなくなってから10年程度そのままになっていたものを改修して、令和4年3月から、こういった例えばeスポーツ、インフルエンサーなど、影響力のある、横須賀をPRしていただけるような方の宿舎というか、拠点としてこちらを改修して提供しているというところになっています。現在、6戸ございます。1つの部屋が大体3部屋ぐらいの3LDKになっている施設になります。3戸は、令和6年7月から空きになっていたというところもございまして、この度、空き施設を活用して、選手たちにこちらに住んでいただくというところになっています。

記者

ありがとうございます。そうでしたら、いま1つ空いているという状況でしょうか。

横須賀市文化スポーツ観光部長

今、この4月に1つ埋まっています。

記者

分かりました。ありがとうございます。今、すでに横須賀市在住のパルクールの選手もいらっしゃると思います。そういった選手は、ゆくゆくはこちらに住まわれるとか、そういった予定は決まっているのでしょうか。

横須賀市文化スポーツ観光部長

はい。今回、2戸の中の1戸に、今、選手が住んでいるところになりますので、こちらに、同居していただくような形になります。

記者

ありがとうございます。鈴木選手と大貫選手にお伺いしたいのですが、2人にとって横須賀はどういった街で、こういったところに移住することによって、先ほどおっしゃっていただいたことでも

問題ないのですが、成し遂げたいことや目標を教えてください。

鈴木選手

はい、そうですね。横須賀市さんにサポートしていただくので、もちろん今までとおりのものもありますし、今まで以上に練習を頑張って「横須賀市」を世界の中で全員が知るようなぐらいまで持っていくことにパルクールを使っていけたらな、ということが、いちばん大きい目標です。あとは「パルクールって知っている？」って聞いた時に全員が「知っている」と答えてくれて、横須賀の人たちもそうですし、他の方もそうですし、「あの人たちって横須賀の人だよ」と言ってもらえるように広めていきたいなということが目標です。

大貫選手

僕が思う横須賀の魅力は、まず僕が今まで人生で見てきた市の中でいちばん魅力があるなということと、海も近くて景色も綺麗で空気も美味しくて、そういうところがすごくいいなと思っています。それから、僕が横須賀で成し遂げたいことですが、横須賀でもそうだし、僕の人生の目標としてもそうですが、今、やはり、いろんなスポーツでアスリートとしてお金をいただける、食べていける世界だと思います。でもパルクールは、まだそうではなくて、外の業界からしてみれば、知名度もまだまだ低くてマイナーなスポーツと思われているの。そこを僕は変えたいなと思っています。これから横須賀に移住して、ここから世界に羽ばたくことによって、パルクールをする子どもたちが将来的に、選手としてお金を稼ぎたいと思って、その子たちが大人になってアスリートになった時に、しっかりパルクールアスリートだけでお金を稼げる世界線を、僕は作るためにこれから活動していきたいなと思っています。

記者

聞き漏らしていたら大変恐縮ですが、パルクールはフランスが起源と資料がありますが、どこの国が、いちばん盛んですか。日本が、いちばん競技人口が多いのでしょうか。

大貫選手

日本も世界的にかなり盛り上がっている国ではあります。強豪選手がいる国、競技人口が多い国としてはアメリカがかなり多くて、現世界チャンピオンはスウェーデンにいます。スウェーデンでもすごく盛んです。

記者

もう一つ追加で、5,000人というのは日本国内の競技人口、それとも世界の競技人口ですか。

東京都体操協会パルクール委員会 吉田委員長

日本だけで、競技人口というか、実際にパルクールを一生懸命やって、競技があれば出たいなという人が国内で5,000人はいると思います。

記者

世界でいうとどのくらいになるのでしょうか。

東京都体操協会パルクール委員会 吉田委員長

世界になるととんでもない数になります。例えば一つの例を挙げると、今、世界選手権は2年に1回開催されていて、前は日本で開催したのですが、52カ国から選手が来ていました。なかなかアーバンスポーツで52カ国から選手が集まるのは、おそらくスケボーやボルダリングでもないのではないかと思います。それだけ今、世界的にはかなり普及していると思います。

■案件外質疑応答

記者

ピンクのシャツを着ていらして、今日、ピンクシャツデーですが、いじめがなかなか無くなりません。いじめ撲滅に向けた市長の思いや、市の取り組みを何かご紹介いただけますでしょうか。

市長

いじめや、それからDVとか、その世界をなくすために、ある意味では政治家になったところです。私の基本姿勢が、これに表れているとご理解いただければと思います。自由であるということ、いつも申しあげたように、生きていくことでも何でも全て自由で、様々な生き方が多様化していく中で、その妨げになっていることが、今言ったようないじめだと思えます。私もDVで育てられて、かなり屈折した人生を歩んだ時があるので、それが無い社会を作りたいというのは私の政治家としての基本なので。今でも全てのいじめ、全てのDV、そのような陰湿なものに関しては、絶対に許してはならないという決意で政治に臨んでいます。議会にしても政治姿勢にしても。それは職員に対してもいつも話をしているところです。

記者

2月以降、水道メーターが盗まれています。もう150個くらいに達したと思います。それに関して、2点ありまして、市長はどのように考えていらっしゃるか、犯人に何か言いたいことがあるかということが1点。なかなか1個2500円の被害品のもので、そこにどれくらいの対策とリソースをかけていくかいろいろ考えているかと思いますが、現状の対策がありましたら、教えていただければと思います。

市長

まず私の感想からすると、そういう時代になったのかなという思いがあります。それをどう捉えたらいいかと、ずっと考えています。貧困が原因なのか、そういう犯罪が多発している中で、ここまで来たのかなと。横須賀市はそれまで無かったので、そういうことは。みんなで助け合ったりする社会だったので、そういうことがなかったのも、横須賀市にまで来たなという思いは持っています。それは社会状況がそういう状況になったのだと私は思っています。あとは部長から説明をお願いいたします。

上下水道局経営部長

2月から頻発している盗難につきましては、まず報道機関の皆様にご協力をお願いして、報道していただくことによって、これも1つの抑止力になるかなと思っています。集合住宅が被害に遭っている件が多いので、その管理者や入居者の方に情報提供をし、見回りを依頼しております。都度、警察には被害届を出しておりますので、警察でも巡視の強化をいただいております。また、職員による県営住宅、市営住宅の全戸一斉点検を行いました。その後もまた盗難被害が出ていますので、これは私たちごとになってしまうと思いますが、続けていきたいと考えているところです。長い期間空き家になっているところは、全戸はできていませんが、メーターの取り外しを始めています。加えて、全国で盗難被害が頻発していますので、それに対応する盗難防止器具をメーカーが開発しましたので、それも既に発注をかけており、納品されしだい、設置をしていきたいと考えているところです。

記者

ありがとうございます。2ヶ月に1回、定期検針で回っていて、その他にもう1回、随時回っていくということでしょうか。

上下水道局経営部長

そうです。先ほど申しあげたとおり、経営料金課の職員総出で、市営・県営の集合住宅を一斉に点検しました。

記者

ありがとうございます。空き家が増えてきたところが課題なのかなと思っていました、それは横須賀市だけではないですが、まさしく横須賀市も抱えている人口減少という課題なのかなと思っています。先ほど市長が「助け合っている社会だった」というお話がありました。犯罪が起きてしまうことに関して、社会の流れが変わってしまったとお考えでしょうか。

市長

それはよく考えていました。悪く考えれば、屋外にある、例えば空調の設備など、屋外施設、様々なものがあると思いますが、それがこれから盗まれるのではないかとまで考えなければいけない社会になってしまったのかなと思っています。それは社会がどうのというよりも、そういう時代背景になってしまったのではないかとと思っています。社会が、様々な情報が手に入って、様々なことで、ルール無用で生きている人間が増えてきたということは、現代社会の中で仕方がないことだとは思いますが、一方で助け合う社会もあるので、それを信じてこれからやっていかないといけないと思います。

記者

答えられる範囲で構いません。自衛隊の方が自民党の党大会で歌を歌った件が話題になりました。政治的中立性という点で議論を呼んでいます。自衛隊を抱えている自治体として、市長の言える範囲でのご所感、お考えを聞かせていただけますでしょうか。

市長

それは自民党、国家の問題であると思いますので、ここでの答えは差し控えさせていただきます。

記者

ホルムズ海峡の自由な通行が、依然として円滑に回っていません。今後、まだ先になると思いますが政府から、車の運転を自粛してほしいなど要請が発信された場合、地方自治体の市長として、まだ先の話かと思いますが、市長のご所見があればお伺いできればと思います。

市長

まだ仮定の問題ですので、今のところは考えておりません。その時に考えたいと思います。

記者

先ほど水道メーターの話の中で誰がやったかについての言及が少しあった部分についてですが。

市長

今いたるところでこのような話をお聞きしているので。私は横須賀市民にそういう人はいないと信じたいという思いからです。横須賀市民を信じていることからだにご理解いただければと思います。

記者

社会が変わったということですが、過去にこのような事例はなかったということによろしいですか。

市長

全くそのとおりです。記憶の限り、横須賀ではなかったです。

記者

水道メーターに限らず、転売すれば金目になるものが盗まれるという意味で、過去に前例はないのでしょうか。

市長

少なくとも私が認識している限りではないです。組織的と言ってはおかしいですが、これだけ広範囲に起こったことはないと思います。1つ2つどこかで盗まれたことはあったかもしれませんが、

私の知る範囲では、こういう問題というのは今までなかったです。

記者

先ほど質問があった誰が盗んだかという発言については市民を信じたいという意味で、特定のグループを指しているわけではないということによろしいでしょうか。

市長

そのような思いはないです。横須賀市民を信じている自分としてはという意味です。ご理解いただければと思います。

以上